
メルティングシャーベット

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メルティングシャーベット

【Nコード】

N2464P

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

某携帯文学賞佳作作品。 同級生の母と関係を持ち、純粹にその恋に向き合おうとする高校生と、背徳感に悩みながらそれを断ち切るに断ち切れない女の物語。

？

ファミリーレストランの禁煙席で向かい合う二人を、周りはどう見ているのだろうか。

いつも僕はそんなことを気にしてしまう。

真紀いわく、それは無意味なこと、なのだけれど、想像せずにはいられない。

ずいぶん年の近い親子。

家庭教師と生徒。

親戚のおばさんと甥っ子。

ずいぶん年の離れたカップル。

どれもそうだと言われれば、不自然ではないではないか。

四十手前の女性と高校生が付き合って何が悪いのだ。

僕たちは付き合っています。

今すぐ真紀の肩を抱いて宣言すれば、後ろめたい気持ちも少しはやわらぐのだろうか。

どうして真紀といるとき、周りが敵だらけに見えてしまうのだろうか。

「やっぱり、裕樹には話しておいたほうがいいと思うの」

真剣な眼差しを受け流し、僕は外を通りすぎる同世代の学生たちに目を向ける。

皆、このファミリーレストランから始まる坂を立ち漕ぎで上り始めている。

誰もが皆、子供じみて見える。

「あの子、きつと気付いているわ」

「ああ、あいつは気付いているよ」

切実な眼差しを受け止めると、真紀はたじろいで目を逸らした。

色白の額に、几帳面に切りそろえられた黒髪が掛かる。

「知ってたの？」

「いや。でも、あいつはだいぶ前から気付いているよ」

二人の関係を真紀の息子であり僕の同級生でもある裕樹が気付いているという確信は、ずいぶん前から持っていた。

「だって、あいつはもう、俺に話しかけてこないもの」

僕の言葉に真紀はうつむく。

辛いとき、歯を食いしばる仕草は親子で瓜二つだった。

真紀と関係を持ち二人きりで会うようになってからも暫く、僕は裕樹と行動を共にしていた。

その日は確か土曜日で、午前中で授業を終えた僕たちは連れ立って下校した。

駅前で昼食を摂り、近くのゲームセンターに行き、夕食までの時間を過ごした。

それは特に変わったことの無い、裕樹との日常だった。

何を話したのかは覚えていない。

だから、どうして僕が殴られることになったのかも覚えていない。

しかし、拳を握り締めて僕を見下ろす裕樹の顔は、憎しみに満ちていた。

恐らくそれが、彼が僕と真紀の関係を知った日だったのだろう。

それ以来、裕樹が僕に話し掛けることはなくなった。

「でも、一度きちんと話しておこうとは思っているよ」

真紀の手を取ると、そこから震えが感じられた。

高校の授業を受けるには、親の意志と自分の意志、学校側の許可、そして同級生たちの許可も必要になる。

僕はどうやら同級生たちの許可を取り消されたらしく、まともな授業を受けることが出来なくなっていた。

朝、登校すると自分の机が無く、教科書は黒く塗りつぶされ、だれも僕と目を合わせようとしない。

席に着くと斥力が働いたように皆、離れていく。

いつの間にか僕と真紀の関係は、教室中に知れ渡っていた。

裕樹は僕をすっかり悪者に仕立て上げていた。

でも僕は直接的な打撃以外、それほど苦痛を感じることなく学校生活を送っている。

あるのはむしろ、怒りだった。

ぼくたちを受け入れてくれない憤りだった。

教室中に認められなくとも、裕樹にだけは二人を認めてもらいたかった。

「俺は真紀さんと付き合っているよ」

自転車置き場で待ち伏せして、僕はそう打ち明けた。

汚いものでも見るような目で裕樹は僕を一瞥したあと、そそくさと自転車に跨った。

追いかけてよとしたところを四五人の男子に担がれ、体育館の裏手に連れて行かれた。

殴られ、蹴られても黙って耐えた。

アスファルトに頭を押し付けられると、耳がちぎれそうなほど痛かった。

ひどく楽しそうな顔で男子たちは僕を蹴ったが、血液の赤い色を見た途端、青ざめて帰っていった。

どうして僕は殴られたのだろう。

「その傷、どうしたの？」

心配そうに聞いてくる真紀の問いに、純粹な疑問が浮かび上がる。

人が好きあって、付き合って、それでどうしてこんな目に遭うのだろう。

手当てをする真紀の腕を取り、抱きしめた。

骨が軋む音が聞こえる。

華奢な体は僕の体重を支えきれず、倒れてしまう。

胸の鼓動が脈打っている。

ぼくは真紀に体を預ける。

こんなに好きなのに。

そう思いながら僕は目を瞑る。

？

初めて裕樹が拓哉を家に連れて来たとき、私はまだ、確かに母だった。

母として息子の友人に接し、他愛のない会話を交わすだけで、邪険に扱われないうちにその場を退いた。

無意識に息子と付き合う人間の観察をするようになっていた私は、拓哉に対してアンバランスな印象を第一に受けた。

ひ弱そうで綺麗な顔立ちをしているが上背があり、がっちりとした体格をしていて手も足もながい。

カップを掌で覆って大切そうにホットミルクを飲む一方、クッキーは口いっぱい頬張って滓をこぼしながら食べる。

皮肉じみた笑い方をするのに、話すときはこちらを射抜くようにまっすぐな視線を向けてくる。

少し扱いを間違えるだけで崩壊してしまうような、十代後半の男の子にありがちな印象ではあった。

拓哉は裕樹との家での会話に頻繁に出てくるようになっていた。

トイレに行くにも、昼食を摂るにも、下校するにもどうやら二人は一緒らしい。

数少ない口からでた言葉でも、それらを想像するのは容易だった。

いつしか拓哉は私の中で最もイメージしやすい男性として存在していた。

拓哉でなければならなかった理由を、私は瞬時に挙げる事ができない。

誰でもよかったのか。

これは彼との関係が密になるほど膨む疑問の一つだ。

もっと年齢の近い、物分かりのいい大人との関係であれば、こんな

にも苦しむことはなかったのに。

何度そう思ったことか。

一日中家にいるわけでもなく、その気になればそれなりの人物を見つけることは可能だったはずだ。

しかし、私には拓哉だった。

彼は私の中の、私自身が失くしてしまっただと思いついてきた女の部分を気付かせてくれた。

唯一、私を一人の女性として扱ってくれた。

恐らく彼は私以外の女性にも同様に接しているのだろう。

でも、母親として十年以上を過ごしてきた私にとって、拓哉が友人の母に対する態度の中に垣間見せる女性への恐れや好奇心のような感情は、女心を蘇らせるには十分だった。

それは拓哉でなければならなかった理由にはなっていない。

でも、私はなんだか億劫になり、考えるのを止めてしまう。

それはきつと、私が臆病だからだろう。

臆病だから簡単な答えに縋りついてしまう。

？

雨が降って、晴れて、気温が乱高下している。

僕は風邪を引いた。

季節は初夏に差し掛かろうとしている。

窓の外の街路樹は緑に色付いているが、陽の光が薄く、淡く力なく見える。

もう三日、真紀に会っていない。

声も聞いていない。

一週間、電話もメールもしない約束になっている。

真紀の夫、裕樹の父が単身赴任から戻っている間、僕は手も足も出せなくなる。

付き合うときの約束として、そういうことになっているのだ。

夫が戻っている間は一切の接触を禁ずる。

真紀いわく、それが僕たちの関係を良好に保つ秘訣、なのだとか。

僕はその人に会ったことが無い。

まだ裕樹の家に通っていたとき、リビングで真紀の横に並んで写る背の小さな男の写真を見た覚えがあるが、顔までは覚えていなかった。

た。

その男は年に四、五回ほど家に戻る。

大体が盆と正月と大型連休だが、今回はそのどれにも当てはまらない。

奇妙なタイミングでの帰省だった。

風邪をひいてよかった。

そう思う自分がなんだか可笑しくなり、僕はベッドの中で少し笑う。

鼻を思い切り啜った後、布団を頭まで被り、真っ暗闇の中で目を開けてみる。

暗闇で何も見えない。

鼻が詰まっている。

胸が苦しい。

それは風邪だからではない。

何も考えまいと目を瞑っても、いつの間にか知らない男の顔が浮かんでできてしまう。

背の低い男は、顔が無いのに笑っている。

大人の、余裕ぶつた微笑みだ。

同じく微笑む真紀の姿が浮かんでくる。

それが僕に向けられているものではないのだと思うと、胸が苦しくて仕方が無い。

最後に決まって、裕樹が見せた、あの憎しみに満ちた表情が浮かんでくる。

「入るわよ」

ノックが終わらないうちに母が部屋のドアを開けた。

「あんた、なんて顔しているの？」

そう言われて鏡を見ると、僕の顔はいつのまにか苦いものでも食べたような表情を浮かべていた。

「熱は下がった？」

僕は頷く。

「明日から学校へ行くよ」

食事を机に置くと母は立ち上がったが、なかなかその場を立ち去ろうとしなかった。

「間違ってたらごめんなさいね」

そう言いながら彼女はベッドの端へ腰掛けた。

「噂になっているみたいだから訊くけど、あなた、クラスの子の母親と付き合ってるって本当？」

努めて冷静を装ってはいたが、母の声は震えていた。

噂は、当事者の耳に入らないように語られる。

耳に入るときは、決まって誰かの悪意が引き金になっているものだ。

「どうなの？」

黙っていると、震えの増した母の問いが降りかかってきた。

「付き合ってるよ」

僕は勇気を持って母を見た。

母は滾るように潤んだ瞳で僕を見て、

「どっして…」

とだけ、か細い声を上げた。

鼻は詰まっていたが、僕の頭は却って冴えていた。

社会的に間違っていたとしても、自分の気持ちに正直に生きると決意していた。

「僕は真紀さんのことが好きだよ」

「あなた、それがどういうことかわかっているの？」

「母さんには悪いけど、わかった上で言っているつもりだよ」

言い終わらないうちに僕は頬を打たれた。

母に打たれたのは初めてだった。

「じめん」

僕が言うと、母は泣き出した。

「私には理解できないわ」

母の泣く姿を見ると悲しくなったが、それが真紀を好きでなくなる理由にはならなかった。

？

ゴールデンウィークに帰省してきたばかりの夫が連絡もなしに家へ戻ってきた時、私はある種の予感めいたものに慄いていた。

夫はただ、休みをもらってきた、とだけ言葉少なに語ったが、何をすることもなく家で一日を過ごした。

私は夫のために客用布団を干し、風呂を隅々まで磨き、手間のかか

る料理を作った。

食卓を家族三人で囲む。

家族との時間が嫌いでない自分がある。

そこには、母親であり主婦である自分がある。

きちんとした家事をすることで存在意義を見出すこともできる。

最近滅多に出なくなった裕樹の笑顔を見ると、素直に喜ばしく思える。

家族も大切。

でも、拓哉との関係も、もう捨てられない。

私は卑怯な女だ。

夫の背中を見ながら後ろめたい気持ちに囚われる。

「父さん、早く家に戻ってきてよ」

食事中、裕樹は何度もそう言った。

時に笑顔で、時に、切実そうに。

理由は明白で、私と拓哉を引き離したいからだ。

彼は、夫が帰っているとき二人が連絡を取っていないのを知っている。

息子は私に直接、拓哉との関係を問いただしたりしない。

でも、彼は知っている。

私と拓哉以外で、二人の関係を一番理解しているのは裕樹なのだ。

そのことをお首にも出さないで親子を演じてくれていることに感謝しつつ、私たちの知らないところで壮絶な妨害工作を行っている息子に恐れを抱かざるを得なかった。

景色の色が薄い季節が、私は嫌いだ。

夜。

ぼんやりとした月が、灯りを消した部屋を照らす。

隣で寝息を立てている夫は、私より七つ年上なこともあり、中年男性の典型のようである。

私が変わっていないとは思っていない。

しかし目の前の男は会うたびに草臥れていつている気がする。

髪が大分薄くなってきている。

頭頂部が油でキラついている。

かつて愛していたであろう男の影は、そこには無かった。

私は頭上に光る月に目を移し、その白さ、アオさを、拓哉の首筋や、細長くしなやかな腕に重ねてみる。

私はその、まだ発達途上の胸板に顔を埋めたのだ。

精一杯の力で抱きしめてくれる。

息が苦しくなるほど。

私に夢中になってくれるその体。

私は、拓哉を想っていた。

だから、その分厚い手にお腹を抑えられた時は、頭から冷や水をか
けられた気がした。

おぞましい。

全身が粟立っていくのが分かった。

私は反射的に夫に背を向けた。

お腹の底に心底冷たいものが流れ込んできている気がする。

私はひどく震えていた。

「やっぱり、本当らしいな」

夫は嘲るように言う。

「若い男に入れ込んでるらしいじゃないか」

その口ぶりから、いやらしい口元が想像できる。

「寂しくさせたのは悪かった。でもよりもよって裕樹の同級生に手をかけるなんて、どうかしてるぞ」

そして優しい口調で、

「相手が若すぎる。それに、お前ももう若くないんだ」

そう言い、私の肩に手を置いた。

「今回の件は俺にも責任がある。特に責めるつもりもない」

全身に鳥肌が立っているのが分かる。

どうしてここまで、体が拒絶するのだろう。

いままで十年以上、一緒にいたのに。

「だが裕樹の事もある。そろそろ火遊びはおしまいにしてくれないか」

夫の野太い声が、私の耳元をかすめる。

拓哉との関係を辱められたようで私は激しく憤ったが、憤慨する代わりに泣いた。

声を押し殺して、泣いた。

？

十日待っても真紀からの連絡は途絶えたままだった。

その間、こちらから連絡しようとは何度おもったことか。

しかし、自制心を総動員して通話ボタンを押そうとする指を離してきた。

ため息とともに電話をしまつと、裕樹の笑い声が聞こえてきた。

近頃、少し明るくなったような裕樹は、でも僕の存在を否定し続けている。

僕が仮に彼の前に立ちただかっただとしても、裕樹は気に留めずに横をすり抜けていくだろう。

それはまるで、面倒な障害物を避けるかのよう。

「うちの親父、帰ってくるんだよ」

週末の予定をクラスメートと話しているとき、裕樹はこつ切り出し

た。

「ようやく、こっちに戻ってくることになったんだ」

それが僕に向けられた言葉であることは明白だった。

もちろん彼は僕に話しかけているわけではなかったが、僕にははっきりとそれがわかった。

裕樹の言ったことの意味を考え立ち上がれないでいると、帰り際、彼はこちらに視線を向けてきた。

勝ち誇ったような目で、裕樹は僕を見た。

たまらず僕は真紀との約束をひとつ破った。

震える指で通話ボタンを押すと、機械的な呼び出し音が鳴る。

電話を握り締める手が、汗ばんでいくのがわかった。

呼び出し音は、一回も鳴らないうちに留守番電話サービスに切り替わった。

僕は発信音を聞く前に通話を遮断する。

そして勢いよく立ち上がり、そのまま学校を飛び出した。

無心で自転車を漕いでいくと、いつの間にか真紀の家の近くまで来ていた。

住宅街に挟まれた長い坂道を上れば、そこはもう真紀の家だった。

しかし僕はその手前で自転車を降りた。

そして、呆然と眼前に広がる上り坂に目を向けた。

目の前に広がる景色が、一面、夕焼け色に染められている。

家にはいけない。

脳裏に、裕樹の顔と、思い出せない背の小さな男性の面影がよぎる。

三人の幸せそうな家族の姿が容易にイメージできる。

夕暮れ時を並んで歩く、楽しげで穏やかな三つの影。

それが想像でないとわかるのに、ずいぶん時間が掛かってしまった。

もちろん何度も辞退したが大人の強引さには及ばず、真紀の夫に背を押されるまま裕樹一家と夕食を共にすることになった。

そのレストランは、住宅街の一角にひっそりと佇んでいた。

店内は暖かい間接照明と静かな音楽に満たされていて、ファミリーレストランの喧騒の中で逢瀬を重ねてきた僕は、ある種の敗北感に

とらわれていた。

「昔からお祝い事があると、よくここを利用していらっしゃるんだよ」

背の小さな、でも温和それで余裕のある夫が嬉しそうに言う。

その土地に根を張って暮らしている人間にしかわからないような場所、常連のように挨拶され個室に案内される姿を見て、僕は一家の過ごしてきた長い時間を感じずにはいらなかった。

「さて、強引に誘ってしまったようで悪かったね」

テーブルに着くなり、夫はまるで悪びれずにそう言った。

「でも拓哉君の話はよく聞いているから、ぜひ一度話してみたいと思っていたんだ」

まるで本当にそう思っているような顔で夫は言う。

「ずいぶん二人がお世話になったそうだからね」

目配せされた真紀は夫の隣で曖昧な笑みを浮かべ、裕樹は僕の横で何事も無かったようにメニューを覗いた。

最初の料理が運ばれる前に、僕たちは乾杯をすることになった。

「単身赴任を始めてから六年」

ワインを片手に夫は語り始めた。

「最初は二年で戻れる約束だったが、そう単純なものでもなかった」
夫はグラスを少し下げ、

「お父さんにもやらなければならなかったし、それには二年という年月はあまりに短すぎた。家を空けている間、裕樹や真紀には寂しい思いをさせた」

そして再び高々と掲げ、

「でも、漸く戻ってくる事が出来た。これからはみんな一緒だ」
そう言つて乾杯の音頭をとつた。

僕にはそれが、夫の勝利宣言のように聞こえてならなかった。

食事中、どんな会話を交わしたのかは覚えていない。

もしかしたら、僕は会話に入っていなかったようでもあるし、一言二言、意見を述べたのかもしれない。

真紀は始終、曖昧な微笑を浮かべ、夫の話に相槌を打っていた。

目が合つても何も語りかけてこなかったように思う。

真紀がその場で僕と交わした唯一の言葉は、

「シャーベット、食べる？」

だった。

店を出ると、夫は少し酔っているようで、会社に対する自分の功績を声高に語って聞かせた。

僕はその話の半分も理解できなかった。

この男が一家を養ってきた大人の男であることに間違いは無い。

つまらない大人。

でも、何も無い自分よりは価値のある人間に思えた。

「では、僕はここで」

夫の講釈は続いていたが、僕は一刻も早くそこから逃れたくて、坂道の麓で話を遮った。

「どうせだから家においでよ」

薄笑いを浮かべて、裕樹が言う。

夫もそれに同意したが、僕は頑なに辞退した。

「そうか、では残念だが、ここでお別れだね」

夫は実に名残り惜しそうにそう言っただけ。

真紀は夫の一步後ろに隠れていて、その表情を見てとれない。

「ほら、真紀もお別れしないと」

退散しようとした背中を、その言葉に引っ張られた。

僕は振り返り、夫に促され一步前へ出た真紀を見つけた。

辺りは整備された住宅街の街灯で昼間のように明るく照らされている。

真紀の顔の陰影ははっきりと映し出されていたが、その表情は曖昧なままだった。

「ほら、真紀。さよならだよ」

夫の優しい声が浴びせられる。

「今、さよならするんだ」

？

逃げるような足取りでその場を去った拓哉を、私は呼び止められなかった。

頭の混乱が長く続きすぎて、思考が麻痺していたのだと思う。

でも仮に正常な私がいたとして、あの場でさよなら以外の言葉を拓

哉にかけることができたのだろうか。

私は拓哉と別れ、幸せな家庭に戻るための坂道を登った。

その道すげら、拓哉との今後を必死に考える自分がいた。

上機嫌な夫の話に相槌を打ちながら、いつになく甘えてくる裕樹に微笑みながら、私は拓哉を思い出していた。

病的に青い、思いつめたような顔。

一生懸命、私に訴える眼差し。

諦めることが正解なのは、はじめからわかっていた。

自宅に戻りコーヒーを淹れると、それを旨そうに啜る夫がいる。

私をソファーに招き入れる裕樹がいる。

みんな笑って、みんな、幸せそうだ。

「今日は、気分がいい」

とまで夫は言う。

ビールでも飲もう、と言われ、私は呆れたふうに冷蔵庫へ向かう。

「ごめん、ちよつと切らしちゃってるみたい」

リビングに向かってそう声を掛ける。

ソファで二人はカードゲームを始めている。

「私、ちょっと買ってくるわ」

「そこまでしなくてもいいよ」

夫はこちらに顔を向ける。

「大丈夫、すぐ戻ってくるから」

私は微笑んで、財布を掴む。

「父さん、早く」

裕樹に促され、夫はカードに注意を向けた。

家を出て角を曲がると、私は坂を駆け下り、衝動的に携帯電話を取り出したのだった。

(後書き)

一言でも感想いただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2464p/>

メルティングシャーベット

2010年12月1日11時32分発行